沖縄県
【重点プロジェクト計画】

カボチャの安定生産に向けた取組支援

活動期間：令和4年～（継続中）

概要

〇農業改良普及課においては、これまでJA等関係機関と連携して、系統出荷者の支援に取り組み、2か所 の拠点産地を育成してきた。

〇近年、北部地域では出荷形態の多様化が進み、系統外出荷が7割を占めており、市場関係者から系統外出荷者のカボチャの品質や生産力に対して、改善を要望する声が寄せられていた。

〇そこで、「系統外出荷者のカボチャ品質の向上と生産力強化」を重点活動課題として、早期の産地立て直しに取り組んだ。

〇市場関係者と連携した活動は、北部地域全体の産地力の向上や支援体制の再強化を図る上での大きな足がかりとなった。

具体的な成果

1 栽培技術等支援体制の構築

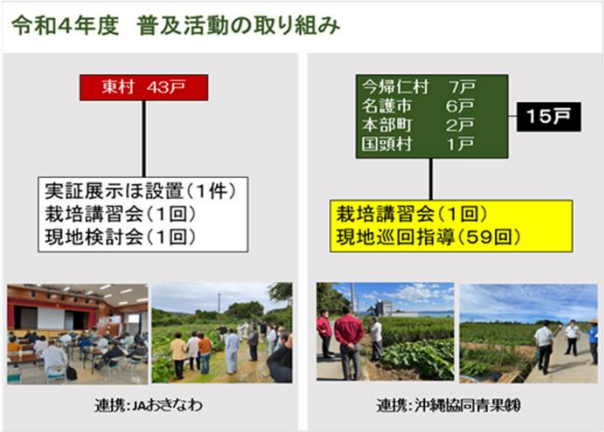
■これまで支援が薄かった系統外出荷者に対して、市場関係者と連携した栽培講習会、現地検討会を開催すると共に、展示ほ設置による情報提供・共有を図り、支援体制ができつつある。

2 栽培技術等支援手法の確立

■産地及び生産者が広域に点在しており、効率的かつ効果的な巡回指導を行うために、栽培記録簿やチェックシートを活用したことで、栽培技術の農家への伝え方の工夫や技術上の改良点発見に繋がった。

3 栽培技術の向上

■巡回指導を継続した結果、品質や単収が向上した生産者も見られた。

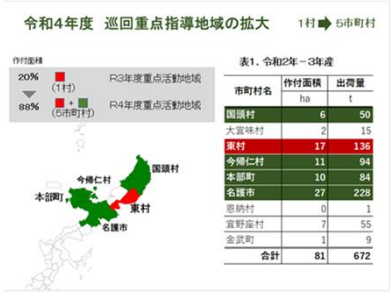


普及指導員の活動

令和4年
～令和5年

■系統外出荷者の多い4市町村に絞り、重点指導対象者として系統外出荷者15名を選定した。

■生育ステージごとに、栽培管理状況ヒアリングシート及びチェックシートによる管理項目別到達度の見える化を図った。



令和5年
～現在

■農家・関係機関向けに展示ほ結果などをQRコードを作成し、タイムリーな情報提供を行った。

普及指導員だからできたこと

- 市場関係者と連携し、北部地域で約7割を占める系統外出荷者への栽培技術支援を行うことができた。
- 継続してJAとの連携による栽培技術支援にも取り組み、北部地域全体の栽培技術向上に繋がった。

沖縄県

カボチャの安定生産に向けた取組支援

活動期間：令和４年度～

１．取組の背景

当普及課では、これまでに名護市や東村を重点指導対象地域に選定し、関係機関一体となり、名護市では、2007 年から’12 年までの 6 年間、東村では、2013 年から’22 年までの 10 年間にわたり産地認定に向けた活動の支援や認定後の産地育成に取り組んできた。特に系統出荷率の高い東村では、基本管理技術の定着を図るため各種展示圃での実証を通して体系的な栽培技術支援が図られてきたところである。一方、カボチャの出荷形態を北部地域全体でみると、多様化が進み系統外出荷率の方が高い地域となっている。市場関係者からは系統外出荷者のカボチャの品質や生産力向上に対して、改善を要望する声が寄せられていた。これらのことから、今回、重要課題として捉え、早期の立て直しを図ることを目的に活動に取り組むこととした。

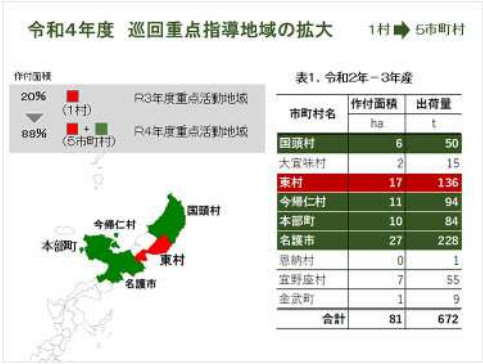
そこで、「系統外出荷者のカボチャ品質の向上と生産力強化」を今期の重点活動課題として掲げた。活動にあたっては、これまでの活動領域から広域な活動となるため、効率かつ効果的な栽培技術支援を展開する必要があり、以下のア～ウについて整理し、巡回指導に臨んだ。

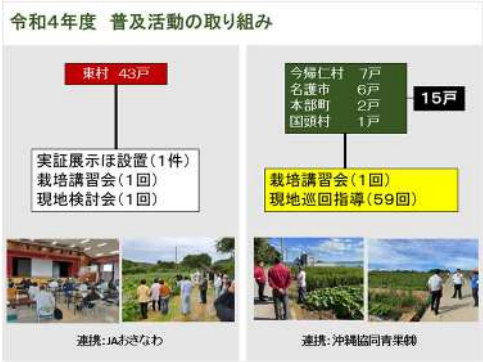
ア. 対象地域及び対象農家の選定
イ. 農家の栽培管理の調査方法
ウ. 栽培技術情報の発信

２．活動内容

ア　対象地域及び対象農家の選定

活動対象地域は系統外出荷者が多い 4 市町村とし、対象農家は、県中央卸売市場の卸売業者が選定した系統外出荷者 15 戸とした。対象農家の内訳は、新規生産者１名、栽培経験３年未満２名、栽培経験３年以上 12 名とした。





イ　農家の栽培管理の調査方法

対象農家の巡回は、11 月より開始した。生育ステージは、交配期（11 月）、果実肥大期（12 月）、収穫期（1 月）それぞれ 1 回ずつを基本とし、合計 59 回の現地巡回を行った。

（ア）ヒアリングシートの作成と写真による記録

限られた時間内で生産者の栽培管理状況を迅速に把握できるよう、あらかじめヒアリングシートを作成し、活動が効率的に行えるよう工夫した。また、巡回当日の生育状況は、その都度写真に記録し、次の指導へと繋げた。

（イ）チェックシートによる管理項目別到達度の見える化

栽培技術支援の足がかりとするため、５つの大項目（①土づくり、②栽培管理、③病害虫防除・生理障害、④作業管理、⑤情報収集）に基づき、19 の項目の到達度チェックを行った。また、到達度は数値化し、レーダーチャートに結果を反映させ見える化を図った。

ウ　栽培技術情報の発信

展示ほの結果等については、ＱＲコードを作成し、スマートフォンを通してタイムリーな情報を農家や関係機関と共有できるよう工夫を試みた。

３　具体的な成果

・今回の市場関係者との活動の連携は、北部地域全体のカボチャ栽培技術の再強化を図る上で大きな足がかりとなった。

・栽培中の生育異常や管理方法等の相談に対しては、ヒアリングシート、記録写真及びチェックシート等を併用することで、それぞれの状況に応じた対応策の検討が容易になり、結果、生育の回復や改善へと繋がったケースがみられた。
・今回の巡回指導を通して、栽培技術の農家への伝え方の工夫や技術上の改良点発見があった。
・今回の活動が、品質や単収向上へと繋がったとの評価を寄せて頂く生産者も現れてきた。

４．農家等からの評価・コメント（名護市・Ａ氏）

これまで栽培講習会等に参加する機会がほとんどなく、栽培は周囲の農家から習いながら生産を続けてきた。今期、普及課の栽培講習会を受講させてもらったことは、これまでの自分の栽培技術に対して見直す良い機会となった。また、巡回指導も定期的にあり、農薬の選定や施肥管理のアドバイスを頂き今期は大幅な収量アップとなった。来期以降も継続的な支援をお願いしたい。

５．普及指導員のコメント（農業改良普及課・班長・上原弘樹）

北部地域のカボチャ生産は、冬春期の県外出荷を主な目的とし、ここ数年は作付面積約 90ha、出荷量 700ｔ前後を推移する産地である。出荷形態では、近年、系統外出荷への割合の高い地域となっている。今後、北部地域全体として、カボチャ生産量の維持増産および品質安定化を図るためには、系統によらず系統外出荷者を含む栽培技術支援強化を図る必要がある。今回、県中央卸売市場の卸売業者との連携のもと、栽培講習会の開催や系統外出荷者 15 名を選定し、栽培ステージに応じた定期巡回を通して、生産者の管理状況の把握と栽培技術支援に取り組んだ。結果、今回の市場関係者との活動の連携は、地域全体のカボチャ栽培技術向上や支援体制の再強化を図る上で大きな足がかりとなった。昨今のカボチャ経営を取り巻く環境は、肥料や資材価格の上昇で依然と厳しい状況にあり、また、温暖化等により栽培環境も変化してきている。そのため、これらの変化に対応した適応品種や省力化技術の継続的な検討と同時に、循環型農業による持続可能な栽培体系を構築し農家の所得向上へとつなげていく必要がある。

６．現状・今後の展開等

北部地域全体としての産地力の向上に向け、関係機関と協力し、継続的に取り組んでいきたい。

また、１株１果採りを基本とする冬春期のカボチャ栽培は、土づくりから収穫に至るまで半年以上をかけて栽培する露地品目である。この間、本県の地理的・気象的条件により栽培過程で起るさまざまなリスクに対して上手にクリアしていかなければ実需者の望む高品質カボチャを生産することは難しい品目であると考える。それが故に、当地域の新規参入者にとっては、栽培障壁の高い品目になっているとも思われる。新規栽培者がカボチャ生産で着実に儲かる経営ができるよう技術面においても支援の強化を図りたいと考える。

北部地域の今後 50 年間の人口減少幅は、他地域より特に大きいことが推測されてい

る。これらの課題に対して柔軟に対応できるよう、省力化技術の導入検討を図ることは必要であると考える。今後、これらの課題にも取り組んでいきたい。